会報　第四十二号　二〇〇七年五月二十日発行

岩木山を考える

Mt Iwaki Conservation Association

目次

＊はじめに・事務局の仕事は見えているか…1
＊特集「弘前公園有料化を考える」…2
＊第40回自然観察会の報告…3
＊2007年度総会の報告…7
＊事務局からのお知らせ…8
＊編集後記…8

4月末の鳥海山頂と大平沢・右岩陵部が荒川の倉・左が柴柄の倉

ある年の4月初旬、滝の沢と大平沢に挟まれた広い尾根を登って、鳥海山頂を経て岩木山山頂まで行ったことがある。広い尾根を登りはじめて驚いたことは、そこに生育している「ミズナラ」の立派なことだった。

まず太いのである。幹の直径が50cmはあろうかと思われるものが林立しているのだ。そして、それらはまさに「林立」という語に相応しく一本一本が蒼空を目ざして、真っ直ぐに立っていた。

しかも樹高が生半可ではない。これほど立派で威圧感のある「ミズナラ」に岩木山では、ここでしか会えないだろう。岩木山の南面である。岩木山では一番暖かい場所なのではなかろうか。浅学な私にはその理由は分からないが、その所為かも知れない。それにしても、伐られた跡がまったくないのである。何かの理由で人々はこの尾根のミズナラをずっと長い間伐らずにきたのだろうか。そのうちに詳しく調べなければいけない。

はじめに
＝事務局の仕事は見えているか＝

しなければいけないことは重なるものだ。自分でするべきことは事前に分かっているから、計画を立てて、たとえば○をしたら●をして、あるいは○と●を併行させながら、時間がとれると◇をやるという具合に「事を進めて」処理をしていく。

ところが、他人からは私の「しなければいけないスケジュール」は見えないし、解らない。

「自然観察会のために損害保険に加入した」と一フレーズで処理される事項も詳しく書くと次のようになる。

9日間の電話による「自然観察会」参加希望者の受付を終えて、氏名・住所・年齢・性別・電話番号記載の「参加者名簿」を作成し、プリントアウトする。

それに基づいて「損害保険加入」申請書を作成し、プリントして損害保険会社にファックスをする。これで「損害保険加入」が出来たわけではない。保険会社では私が送った資料に基づいて正式な書類を作成する。それから、私のところに、正式な書類を持参して私の署名・捺印を求めてから保険料を請求する。

そして、保険料を支払い、契約事項などについて二言、三言を交わして終了となる。

「損害保険加入」事務と併行して、すでに実施しているこの下見に基づいて、参加者が当日参考にするためのカラー印刷資料（パンフレット）の作成に入る。

これには：北西に広がる農地を育む後長根沢沿いに開析谷地形と早春を訪ねる・コース地図・日程・写真2枚「雪崩あと（デブリという）とマンサクの花」・持ち物・装備・注意事項・観察の視点・観察地域コースの解説・確実に観察できる樹木や草花、野鳥のリスト…などが記載される。

現場に則した案内を心がけるとこのパンフレット作成には、大変気を使うものだ。

実際プリントするとなると「レイアウト」も考える。これら、「気を使い・考える」ことなどは他人には見えない。

そして、このパンフレットも参加希望者数よりも若干多めに印刷も終えた。さらに、参加費と会年会費の領収書も作った。この領収書作りも「印字・プリント・裁断・領収印捺印・氏名

記入」というプロセスが必要であり、「領収書作り」という一言では片付くものではない。

さらに、大事なことがあった。本会の会報４２号の発行である。遅くても今月の中旬には発行したいと考えて、掲載するべき資料を集めながら、そのための「原稿書き」も続けていた。

加えて、２０日に実施する本会担当のＮＨＫ弘前文化センター講座「野外観察」の資料作りもしていた。

このように「事務局として」の仕事は他人からは見えない。しかし、これまでの会報や会報の活動日誌を読んでもらえると、この時期（４月から５月）には「事務局」では毎年何をしているかは想像がつくのではないか。想像出来る人は事務局の仕事が見えている人であろう。しかし、見えている人は非常に少ないようだ。

現実、今週も会員やその他からいろいろな問い合わせや依頼があった。

まずは、ＮＨＫ弘前文化センターからの講座「津軽富士・岩木山」用の写真提供依頼である。要求に応えるために写真を探して、プリントして持参したが多くの仕事を併行している身にとっては「流れ」に竿さされる思いが強い。

もう一人、この講座「津軽富士・岩木山」の担当者がいてこのような処理に当たってくれていたら、私の仕事はスムーズに流れるだろう、と真剣に思った。

また、ある会員からは「調査山行の同行」依頼と調査報告である。これは本当は大変ありがたいことなのである。しかし、以上のような状況下にある私には、それに応える余裕がないのだ。彼は数日前にも「扇ノ金目山」経由で山頂まで行かないかと誘ってくれたが、その日は「自然観察会の下見」を予定していたので、悪いとは思いながらも断った。

観察会が近ければ「下見」をするのが通例であるし、今が、会報の作成時期であるということはまったく彼の頭にはなかったのだろうか。

彼からは「ゴミ捨て現場」発見の報告もあった。木々の緑が濃くなって、その現場が見えずらくなる前に私に見てもらいたいというのである。これも大切なことではある。ただ、現場確認を第三者的な客観性で強固にしたいというのであれば、何も第三者は「私」でなくてもいい、他の人でもいいのではないか。

本会の中に、そのような班なり、グループを結成し、調査をして写真を撮り、それらが事務局に報告事項や報告物として提供される。そして、それを事務局がまとめて資料にしていく。

必要な場合は行政などに報告することもあろう。

これが本来の事務局としての仕事の有りようではないかと、常々思うのだがどうだろう。

そのような形なり、システムのないことが「事務局」に有形、無形すべてのことが集中する結果になっているのである。あえて言わせてもらえば、これは本会の持つ「システム上の欠陥」である。この欠陥を「訂正・修復・補完・補填」しないかぎり、仕事の一極集中はいつまでも続くだろう。

総会の議案にも、別な表現ながら「このシステム上の欠陥」を是正していくような案を提出したが、今年度の総会でも「提案」に終わり、議論は皆無だった。

※特集：弘前公園有料化を考える※

「弘前公園」を本来の「鷹ヶ丘」という自然に戻すことの重要性について－昆虫類の生態・生息的な変化から－。

岩木山を考える会　会長　　阿部　東

弘前公園の有料化問題を考える時、私はコロンブス以来のヨーロッパ人が新大陸の住民に対して取った行動や１６世紀のイギリスで始まった囲い込み（かこいこみ:enclosure）に思いを馳せる。

１４９２年４月１７日、イサベル女王とその夫フェルナンド５世はクリストファー・コロンブスに「発見と征服に関する特権」を与えた。ローマ法王は１４９３年に、それまで発見されていない島や大陸をイサベル女王とその夫フェルナンド５世に寄贈するという教書を出している。

ヨーロッパ君主による特権が、非ヨーロッパ人を植民地化し、根絶するための基礎となったとされている。

１４９２年に７２００万人であった南北アメリカの原住民は、数世紀後には４００万人まで激減したとされている。

これと同じ略奪制度は囲い込みである。これは細かい土地が相互に入り組んだ混在地制における共同で使用していた開放耕地（Open Field）を統合し、土地を垣根や溝で囲み、所有者を、

明確にした上で排他的に私用化することであった。

当時、ジョン・ロックは資本主義における発展の自由は「略奪の自由である。」と言っている。

公園の入場を有料化したということは、公園を植民地化したということである。さらに、市民を排他的化し、有料に沿った形での整備によって、生態系を破壊し、住民（生物たち）を絶滅・減少させたということである。

今から５０年ほど前の大学４年生の時、公園内に仕掛けたトラップでジネズミ、ヒミズ、コモグラ、ハタネズミ、アカネズミの５種類を捕獲出来た。**（写真はヒミズ）**

ところが、１９９７年１１月に弘前高校の生徒と仕掛けたトラップではドブネズミとハツカネズミしか捕獲出来なかった。

また、小学校６年生の時から公園内の昆虫を調べた。中学校３年までの間に：

トラフカミキリ、クワカミキリ、ヒロスジカミキリ、エゾカタビロオサムシ、中学校の校庭で集会の時校長が登る壇としていた木の根っこ（切り株）には、ノコギリクワガタとカブトムシの蛹が沢山ついていたし、ミヤマカミキリ、シラホシカミキリ等の甲虫やらが観察された。

高校生になり、弘前公園の蝶を調べたところ：

現在、植物園内にあるカシワには、特に裏の白い、ウラジロミドリシジミやオオミドリシジミが、オミグルミには、オナガシジミ、ニレ（春ニレと思う）には？タテハ、カラスシジミ、エノキ（エゾエノキと思う）にはゴマダラチョウが発生していた。

また、ヒオドシチョウ（カラハナソウ）、エゾスジグロチョウ（コンロンソウ）、スジグロチャバネセセリ、ヘリグロチャバネセセリ（イネ科）、オオチャバネセセリ（ササ）、アゲハチョウ、カラスアゲハ（サンショウ）、ミヤマカラスアゲハ（キハダ）、オオヒカゲ（スゲ）、ツマキチョウ（タネツケバナ）、メスグロヒョウモン、オオワラギンスジヒョウモン（いずれもスミレ）なども見られた。（　）内は食草。

オナガアゲハの幼虫を教育学部に植栽されたヘンルーダから採った人もいた。濠にはトンボが沢山見られた。

（写真はカブトムシとノコギリクワガタ）

現在は、松の樹皮を食うケブカヒラタカミキリくらいしか昆虫を見ることが出来ない。このカミキリは松の生木の樹皮食いなので、本来ならば害はないはずである。

ところが、その数は脱出孔を見れば直ぐ分かるようにおびただしく、そこから樹脂が染み出していいるのを見ると害をなしている可能性は大きい。

また、このカミキリは幹の明るいところを這い回るので、脱出孔も森の縁の外側に多く、松の木が道路側に傾斜する原因をなすものとみられる。松の巨木を、道路側で支え棒をしていたものが、近年跡形もなくなっているものを３本程知っている。伐って根っこを掘り返して処理したのだろうか。

皇居でさえ、オオムラサキを保護し、自然保全に努めているのに、弘前公園は桜を守るという名のもとに、何と多くの住民を抹殺したであろう。そのため、逆に大切な桜や松が、害虫の攻撃にさらされているという現実に気づくべきである。

かつて、公園の内堀は殆ど、ほったらかしの状態であった。両岸には、ヨシやガマさえ生えて、鯉と鮒が沢山いた。そこにはキイトトンボが生息していた。今でもはっきりと記憶にある。

水は澄んでいてカクタニシ（オオタニシともいう）がやはり沢山這っていた。大学生の時、教育学部の前の濠の水をバケツに汲んだら、中にヒドラが入っていたことを思い出す。これは

（カブトムシやノコギリクワガタの住む林）

水草の多い浅い池などに多くいるもので、正常な淡水自然を示すものだ。

しかし、今は濁った水とアメリカザリガニだけであろう。

当時は、水の天然の浄化作用と景観、自然の姿の公園があったのである。（この特集は次号でも掲載する予定である。）

※「第40回自然観察会」の報告※

40回目の「自然観察会」はこれまでの最少参加者数で実施された。これまでは100名を越える人たちの参加もあった。ただし、それが人数的にはピークで、その後、年を追うごとに減ってきて、最近では30名前後で「定着」していた。

ところが、今回は14名とここ数年の半数までに減らしてしまった。会員外の参加者がわずかに3名である。「少ない」ということでは記録づくめである。その方々に「どうして参加者が少ないのでしょう。」と訊いたところ「自然観察会やそれに似た催事が他でもあり、日程的に重なっている。」「知り合いも最初はこの観察会に来るような話しをしていたが、もっと近くて楽そうなところがあると言ってそちらに行った。」という答えが返ってきた。

とにかく集合時間から解散時間まで土砂降りではないが「雨」に歓迎された催しごとになってしまった。

自然を相手の行事や催事は「晴天」が何よりの贈り物であって、少々計画にずさんさがあっても、案内や主題に不備があっても「終わってみれば「よかった」ということになるものだ。

ところが、「雨天」だとそうはいかない。最初から「雨天」ということで参加者には不満と残念さがある。主催する側は否応なく参加者のこの天気に対する「不満と残念さ」を取り除くことに気を配らなければいけなくなる。つまり、余計な仕事が増えてしまうというわけである。

ところで、嬉しいかな、さすがに「自然観察会」に参加する人たちは、何よりも「単眼」ではない。いろいろな角度から自然を「複眼」的に眺める。

トンボ類の複眼では360度が見えていると言われるが、そのような目で自然を見ようとしているのだろう。だから、「雨の日でなければ見えないこと」もしっかり見ようとするのである。

（参加者のみなさん）

今年は特に早くて里山では、すでにスプリングエフェメラルズと呼ばれるキクザキイチリンソウもカタクリもその開花期を終えていた。しかし、今回の観察地域の林道脇にはまだ咲いているのだった。しかも、カタクリは道路の両側に延々と群生しているのである。標高があり、雪解けが遅い場所だからである。

「時季外れのスプリングエフェメラルズの鑑賞と観察」をもって「雨天」というマイナス要因をプラスに変えて、差し引きゼロ程度にしたいと考えていた。

もう一つ、「嗅ぐ」という感覚を使い、山道で香りから早春を発見してもらい、「雨天」というマイナスをプラスにしてもらうということだった。ただ、暖かい陽気の時ほどその「芳香」は強さを増す傾向にあるので、この天気でその植物たちが「香り」をどこまで発散させてくれるかは不安であった。

さらに加えて、雨天で視界があまりよくないが、見えない時は「聴く」という感覚での「観察」があるわけだ。それは野鳥の鳴き声に耳を澄ますということだった。会員の「野鳥のプロ」が2人参加していたので対応は十分であった。

ところが、その日、「カタクリやキクザキイチリンソウは人の友だち」ではなかった。群生するそれらすべてが、堅く花弁や萼片を閉じて、俯（うつむ）き、頭を深く垂れ、雨のしずくを涙として、埋葬に集う参列者のように立ちつくし、歩いて行

く我々をまるで葬送の列であるかのように見送るのであった。

「カタクリやクザキイチリンソウは曇天や雨天の時は、花弁や萼片を開かない」ということは誰もが知っていることであろう。だれもが「知識としていること」を目の前で、現実として確認できたこと、これを私は、「本物の観察」だと考えている。

そして、目の前の、これらの花が「心を許し、心を開く友だち」は「太陽であり虫たち」であることを事実として受け入れざるを得なかったのだ。

寂しいことだが…、それは言い換えると「カタクリやキクザキイチリンソウ」が心を開く友だちは、決して私たち「人」ではないということであった。

（キクザキイチリンソウ）

まだ葉がまったく出ていない空疎で寂しいニシアカシヤの林である。その林下は緑なす原で、きめ細かくツクシが背丈をそろえて生え、オオウバユリの若葉がサイケデリックな模様と光沢ある色彩でその原っぱに点在していた。そして、降りしきる雨は、静かにその緑とツクシの淡い肌色に吸い込まれていた。

「これは何々です。」という一方通行的な解説で終わる「観察会」もあるようだが、それではおかしい。

自然観察会の目的の一つに「自然で観察されるものと人との関わり合いを知る、そしてそこから覗い知ることで自然を再確認する。」ということがあるように思えるのだ。

その意味から、飢饉植物としての「オオウバユリ」について考えてもらった。名前からも解るように、これはユリ科の植物なので「根」が食べられる。つい最近まで食べていたものだが、それは飢饉の時の代用食としての名残であろう。

私は鼻を利かせて、目で紫色の花を「地肌」に追っていた。その花は、暖かい陽気の時ほどその「芳香」が増す傾向にあるので、暖かくて晴れていれば「鼻を利かせる」必要はまったくないのだが、この天気なのでその植物たちが「香り」をどこまで発散させてくれるかは不安であった。

私は、教えることなく参加者自身に、その「香り」に気づいてもらいたかった。そのためには、まずその花を視認する必要があったのである。

薄紫の小花がチラホラする。だがそれは求める花ではない。ナガハシスミレ（テングスミレ）であった。これは里のスミレだ。種が人の衣服などに付着して里からここまで登ってきたのだろう。距（花にある管状の狭長な突出部。内部に蜜腺がある。スミレの花弁などにある。）が極端に長いので直ぐに見分けがつくスミレだ。

それから、数分後である。香ってきた。何という芳香だろう。暖かく晴天の時よりは、少し弱めであるが、確実に私たちの「嗅覚」は、その「芳香」をとらえ始めたのである。参加者たちは「嗅覚」というレーダーで「香り」の発信源を探し始めたのだ。

林道の縁をきれいな水が流れている。清流といえそうだ。その傍に「香り」の発信源が、咲いていたのである。一輪を採る。それを各自輪番で、鼻に近づけて香りを嗅ぐ。

歩みは止まった。早春の香り、「ヴァイオレット」、アオイスミレであった。葵菫と書き、葉が徳川家の紋、葵の葉の形と似ていることからの命名である。

（エゾアオイスミレ）

私は花弁に注意をしていた。丸みがないのである。花弁の縁が浅く裂けてくびれている。しかも、咲いている場所が、雪解け間もない冷たい水の流れる近くである。となれば、これは「エゾアオイスミレ」だ。本当に珍しいことだ。

この沢の上流のしかも、岩の裂け目で初めて「エゾアオイスミレ」と出会ったのは、確か4月の中旬であった。一ヶ月遅れのこの時季に出会えるとは、まさに「幸運」というほかはない。この出会いも、「雨天」の恵みに違いない。

雨天の時は視界があまりよくない。その理由は、霧とか曇りとか暗いとかいう自然現象だけではない。傘をさしたり、雨具のフードで視界が遮られたり、左右、上下の視野が狭窄されることにもよる。

だが、あまり見えない時ほど「聴く」という感覚での「観察」があるわけだ。

今回のそれは一つに、野鳥の鳴き声に耳を澄ますということであり、二つには、広い後長根沢の川原の林道は一応「沢」に沿って敷設されてはいるが、地形を改変しないで造られているので、ある場所では沢を離れ、別な場所では沢に接近していた。その距離が雪解けをたたえて流れる瀬音を、ある時は激しく、ある時は微かに響かせていた。それに耳を傾けることであった。

広い川原に出る少し前に、杉の植林地がある。まったく手入れのされていない「放置林」である。間伐がまったくされていないので薄暗く、樹下には杉の葉が敷き詰められ、堆積している。緑なす草本の影はない。

昭和40年代から、林野庁は山の雑多な樹木を伐採して、そこに「杉」を植えてきたし、部落林にもミズナラなどを伐って杉を植えるように指導してきた。

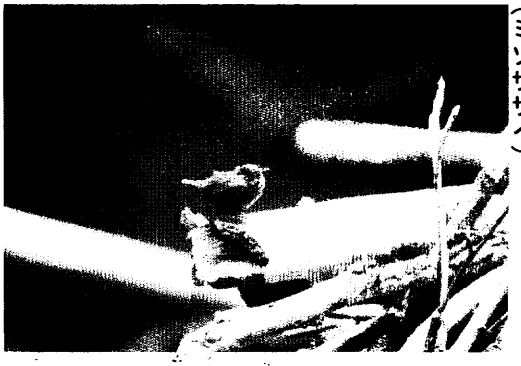
樹木の寿命は人間よりも何倍も長い。ブナなどは400年から500年の寿命であると言われている。だから、林野行政は時間的に長いスパン、つまり数百年を見越した思想がその基本になければならない。しかし、日本政府や林野庁は「目先の価値」を行政の基幹にすえて突っ走ってきた。それが日本の天然林をことごとく消滅させることになったのである。「放置された杉植林地」は、それを証明する現実的な証拠の一面である。

（キビタキ）

杉の植林地を抜けたら、そこは明るく、ヤチハンノキなどが茂り、樹下には緑が一面に繁茂していた。地獄の出口を抜けて天国の門から広場に出たような気分になった。参加者は一様に、杉林と雑木林の「林床と林相」の違いを十分に学んだのである。

明るい森、下草と竹藪に覆われている林床、ここは野鳥の楽園である。林道沿いは藪が濃い。その縁ではヤブサメ、ウグイス、コルリだ。黄色と黒、オレンジ色の色彩で飛び交わし、枝上で鳴き交わすキビタキ。忙しそうに移り飛び交うヒガラやヤマガラたち。

遠く瀬音に混じってひときわ高音でさえずる鳥がいる。野鳥の達人・飛鳥和弘さんが説明をしてくれる。「あれはミソサザイです。非常に小さい鳥で、地味な焦げ茶色をしている鳥です。目立ちませんが、鳴き声は澄んでいて、しかも高いトーンなのでよく聞こえます。あの小さい体で一体どこからあのような声を出すのか不思議なくらいです。」



（ミソサザイ）

時折、激しく雨を降らし、風を巻き上げるが、幸い落雷や雷鳴の一片にも遭遇しなかった。しかも、低空を覆っている雨雲が晴れ渡ることもあった。

その時に、眺められる景色は：「墨絵の世界に淡いカラーが点在している一幅の屏風絵」であった。

それは：眼前には、沢に落ち込んでいる急峻な谷頭が見える。雨天の霧に煙る谷の前景として、その左右に広がっているブナ林の尾根は淡い緑に白いタムシバの花、谷に接する低い部分オオヤマザクラのピンクという美しい色彩なのであった。

（残雪を背にオオヤマザクラ）

しかも、足許には白花のキクザキイチリンソウの群落があった。ここでは会長の出番である。参加者全員でキクザキイチリンソウを一輪ずつ採取し「花びらの数」を数えたのである。9～13枚であった。それを受けて阿部会長は「花びらの数は受け継ぐ遺伝子（染色体）によって決定される。これは何枚でもいいという遺伝子なのである。」と説明した。

全員、満足感と得意げな面持ちを見せていたのである。「よかった。」と心ひそかに思った。

帰路には遠目ながら「堰堤」も観察した。この沢の堰堤は、

土石流をくい止めるということよりも農業用潅漑用水を保持するためという面が濃厚である。

最後にある参加者の感想を紹介しよう。

『雨の中であったが、それを生かしながらの観察会はすばらしいものだ。特に驚き感動したことは「スミレ」の香りである。スミレにあれほどの芳香性があることを初めて知った。植物や花を「香り」で探求し、愛でる経験は初めてである。これからもこの方法での観察を大切にしたい。また、別な意味での感動は「放置されたままの杉林」である。若い頃、「学校林」に杉を植えた。今日見た放置林のようになっているのかと思うと、心が痛む。そして、国や自治体、民間で推し進めてきた事業の無策ぶりに寂しさと憤りを感じている。』

『岩木山』を考える会の7年度総会の報告

…議事について

提案された議案は大枠ですべて承認された。その中から、主に意見が出て審議されたものをピックアップして紹介する。

1．「長平（鰺ヶ沢）の種蒔苗代」（岩木山唯一の高層湿原）調査を今年度から始める。「ウオッチング青森」弘前支部から協力したいとの申し入れがある。参加希望者は事務局に問い合わせてほしい。

2．囲いのない郷土精神形成の「岩木山」という風景を取り戻すために、弘前公園有料化には基本的に反対する。またそのための意見を集約しマスコミなどを通じて提唱する。弘前市議会議員にこの問題についての「アンケート」をとってはどうかという意見もあった。

3．7月第一日曜日に実施されている岩木山清掃登山に参加する。岩木町が主催していたものだが、合併後運営にマイナス変化が起きている。ボランテア的なものに変え、自主的な行事にしていく方向を探るべきである。

4．NHK弘前文化センター講座『津軽富士・岩木山』を出来るだけ開設する。そのためのテーマと講師を本会から発掘しなければいけない。

5．写真展「私の岩木山」を市民参加型の写真展と位置づけて、第14回写真展「私の岩木山」は9月14日（金）～9月16日（日）にNHK弘前放送会館ギャラリーで開催する。特設コーナーを設定し、プロジェクター使用などを計画する。

6．「国有林内の天然林を環境省に移管し保全する改革に関する請願書」の署名用紙に記載されている…

一　誓願の趣旨

『「…現在一部の山域で実施されているような「入山禁止・規制措置」は即刻撤廃し、誰もが登山や釣りをとおして身近に自然と親しむことができる、封印されることのない、開かれた国有林保護政策が実施されることも重ねて強く要望します。』

二　誓願事項

『三、地元生活者による山菜採塔の伝統的権利を保障し、誰もが自然にふれあうことの出来る、国民に開かれた国有林保護政策を実施していただくこと。』…について、

「この部分は天然林を環境省に移管するという誓願の趣旨から逸脱しているのではないか。また、無制限に入山を認めるべきだという意図がありありで、これだと簡単に商業主義と結びつき、自然を保護するという趣旨がないがしろにされるおそれがある。天然林を守れるという時、入山を規制する地域が出てくるのは当然であり、すべて規制を撤廃するということは恣意的な側面を懸念させる。」という批判意見が出た。

※この「国有林内の天然林を環境省に移管し保全する改革に関する請願書」の署名用紙に記載されている文章については、総会時の意見に従い現在会長名で問い合わせています。

7．ホームページ「岩木山を考える会」の充実というがこれは簡単なことではない。ある会員の強い勧めで始めたものだが、現在関わっている会員はわずか2人である。

ホームページを「インターネット岩木山総合学習センター」とし、本会の活動・運動・意思等の発表、発信の場と位置づけて、運営することは、ネット社会の現代では避けては通れない。

°ホームページの技術的担当が可能な要員を増やすことが緊急の課題である。アクセス数は43,000を越えて、社会からの本会ホームページに対する期待はますます強まっている。なお、会員からの情報も写真・文章ともインターネットで事務局に送付されることを望む。

…今年度の予算について

収入の部

	18年度決算額	19年度予算額
前年度繰越	499,957	380,158
会費	157,000	130,000
寄付	136,500	0
利子	11	0
雑収入	9,500	0
合計	802,968	510,158

支出の部

	18年度決算額	19年度予算額
総会費	800	1,000
シンポジウム	92,475	20,000
写真展	23,400	20,000
調査費	5,560	10,000
会報	54,700	60,000
郵送費	148,535	150,000
事務費	87,720	90,000
予備費	9,620	159,158
合計	422,810	510,158

※事務局からのお知らせ

※会費の納入について

同封された別紙には皆さんの会費納入状況が記載されております。

未納の方は同じく同封されている「振替用紙」の「通信欄」に必要事項を記入して、なるべく早めに納入して下さい。

※岩木山清掃登山（岩木山クリーン作戦）は7月第一日曜日に実施されます。参加希望者は事務局に問い合わせて下さい。

※8月上旬に岩木山百沢登山道整備（刈り払い）を岩木山神社と一緒に実施します。参加希望者は事務局に問い合わせて下さい。

※「第28回東北自然保護の集い」は11月10日～11日（土、日）岩手県の「大沢温泉」で開催されます。今から日程の調整をして東北の仲間に昨年の「お礼」の意味も込めて、多数参加されることをお願いします。

会として参加費の一部を負担する方向で検討しています。詳細は次号会報で案内をします。

※編集後記

キホームページ管理人の葛西さんの勧めで2月22日から事務局長日誌という「ブログ」を始めた。今日でちょうど100の文章を毎日掲載している。楽しいのだが思ったよりも大変なことだ。ただ、自分の思いを毎日発信出来ることは嬉しい。私の思いに比すれば「アクセス」はいまいちというところだ。まずは忙しさが二つほど増えた感じだ。

キ今月20日はNHK弘前文化センターの講座「津軽富士・岩木山」で、岩木山麓にある寄生火山・森山に「春の雑木林とその樹下に咲く花々の散策」に出かけた。終日風は冷たかったが、日差しは強く晴れの天気だった。ユキザサ、ウルイ、ウド、タランボ、ソデコ、フキノトウ、ワラビ、ゼンマイ、タケノコ、ボンナなどの山菜に出会った。4月、5月の「低温」のため、残雪の消え方次第で、この時季に、早・遅を取り混ぜて山菜が一斉に「熟れ時」となったようである。新しく受講者が2名増えた。本会の「自然観察会」参加者は年々減少傾向にあるが、この文化センターの講座は健在である。受講生も弘前市だけではなく、つがる市、藤崎町などと広がりを見せている。（以上M）

会報「岩木山を考える」第四十二号（二〇〇七年五月二十日発行）
発行・岩木山を考える会・会長 阿部東・事務局長三浦章男・事務局
〒〇三六―八〇五四・弘前市田町四―一二―七
℡〇一七二・三五・六八一九　＊郵便振込口座番号　〇二三八〇―〇―三七九一四＊ 振り込み先 岩木山を考える会